

運慶研究の最前線

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ 14「美術研究最前線」。2月20日の第1回講演では、文学研究科の根立研介教授が「運慶研究の最前線」と題して、著名な仏師・運慶の業績や遺品を検討しながら、新たな運慶像に迫った。

●運慶の事績



「近年、文献史料の発掘が進み、運慶研究は大きく進展しているものの、なお謎の多い仏師です」と根立教授

仏教美術の中で主に彫刻史を研究する文学研究科の根立研介教授。「近年は仏師論をテーマに取り上げていますが、今日は運慶について、事績をたどりながら紹介したいと思います」

運慶は江戸時代以前から名声があり、近年でも注目度は高い。その理由を、根立教授は「写実性に富んだ力強い作風と巧みさは、今日の我々が見ても感動するものでしょう」と説明する。

運慶の生年は不明だが、1150年代の生まれと推定されており、事績は比較的明らかになっている。

現在分かっている運慶の第一作は、奈良・円成寺の大日如来坐像である。完成は1176年。台座の天板裏面に、運慶真筆の墨書銘が確認されている。

「運慶が20代半ばの作と推定されますが、完成度の高い作品です。顔立ちも体つきの抑揚も非常に写実的で、両膝を大きく張り出して広い彫刻空間をつくり出しています。この像をもって新しい鎌倉彫刻の幕が開いた、ともされています」

その後しばらく事績は不明だったが、最近になって浮上してきた説がある。1186年正月、興福寺西金堂の釈迦如来像の造像に運慶が携わったとする記録が10年ほど前に見つかり、

興福寺に現存する仏頭がその釈迦如来像のものではないか、というのである。

「同年 5 月から静岡・願成就院の造仏を始めており、この釈迦如来像に運慶がどこまで関わったかは、意見の分かれるところですよ」

願成就院は、源頼朝の妻・政子の父である北条時政により建立された寺。本尊阿弥陀如来坐像は、目元が彫り直されているが、頭部や胸にボリュームがあつてたくましく、衣紋の彫りも深い。同じく不動明王と二童子像、毘沙門天像も迫力があり、動きを巧みに捉えている。不動明王、二童子像、毘沙門天像の胎内からは銘札が発見されており、運慶と施主である北条時政の名前と、1186 年から造り始めたことが記されていた。

さらに、1189 年に造られた、神奈川県横須賀市にある浄楽寺の阿弥陀三尊像、不動明王像、毘沙門天像は、願成就院の諸像を少し整理した感のある像だ。毘沙門天像は運慶作かどうか長らく不明だったが、昭和 30 年代の調査でやはり納入品が見つかり、運慶と、施主である鎌倉の初代侍所別当・和田義盛の名前があつた。

1201 年に造り始めたのが、愛知県岡崎市にある瀧山寺の聖観音・梵天・帝釈天の三尊像だ。明治以降に彩色が施されてしまい、詳細がはっきりしないものの、引き締まった顔立ちが運慶の手を思わせる。

そして、1203 年に造られたのが、東大寺南大門金剛力士像である。かつては、運慶と快慶のほか 2 人の仏師によって、約 70 日間かけて阿形像は快慶、吽形像は運慶が中心に造つたとされていた。しかし、25 年ほど前に実施された解体修理で、像内から納入品や墨書が発見され、阿形像は運慶と快慶、吽形像は運慶の弟・定覚と息子・湛慶が中心となって造つた、と記されていた。

「4 人の大仏師がどんな役割分担をしたかは意見の分かれるところですが、運慶が両像の総指揮に当たつたという点については、彫刻史の研究者に一致している意見ですよ」

1212 年には興福寺北円堂弥勒如来坐像、無著・世親像が完成したと考えられる。鎌倉時代の日記に、運慶が造仏初めの儀式で賞を与えられたという記述があり、また弥勒如来坐像の台座の銘文には、運慶の名前はないが運慶一門の仏師の名前が記されている。

従来、運慶の作品は興福寺北円堂が最後とされてきたが、最近になって、横浜市にある称名寺子院光明院の大威徳明王坐像が、1216 年に造られたことが分かつた。修理の際に抽出した納入品は来歴を示す文書で、源実朝の養育係が運慶に造らせた、との記述があつた。「小ぶりの像ですが、顔は実に写実的で、運慶らしい巧みさがあると評価されています」

●慶派の出自は？

文献史料の発掘によって新たな作品がいくつか見つかったが、「近年の運慶研究にまつわる問題点がいくつかある」と根立教授は言う。

「まず1つは、慶派の出自に関わる問題です」

運慶とその父である康慶を中心とする慶派の出身母体は、奈良仏師とする説がある。奈良仏師とは、平等院鳳凰堂阿弥陀如来像で知られ、日本独自の仏像の様式を確立した定朝の孫・頼助に始まる仏師集団。京都で権勢を振るっていた院派と円派とは異なる斬新な作風が特長で、頼助から康助、康朝、成朝と父子相承してきた。

康慶はその康朝あるいは康助の流れを汲むという記録がある。

さらに康慶も運慶も僧綱位を与えられているが、平安時代から鎌倉時代初期にかけて、僧綱位は定朝直系の子孫、あるいは有力弟子など、特権的な仏師に限定的に与えられてきたものである。

つまり、運慶は奈良仏師の傍流である慶派の二代目という、仏師として恵まれた立場の人物であった可能性がある。このことがなぜ運慶研究に重要なのだろうか。

「鎌倉時代の新しい様式を打ち立てた天才的かつ革新的な仏師、という運慶のイメージには、仏師としては出自が低い集団から這い上がってきた、という背景が重ねられてきました。まだまだ不明点が多いとはいえ、運慶は有力な仏師集団の後継者であったことも踏まえて、彼の作品を検証する必要があると考えています」

●文治年間の運慶の動向

「もう1つは、文治年間（1185～1190）の運慶の動向です」

文治年間は、興福寺西金堂、願成就院、浄楽寺などの仏像を手がけているが、問題となっているのはこれらと、第一作である円成寺・大日如来坐像とは作風が大きく異なることである。円成寺・大日如来坐像が鎌倉時代的な端正な造形であったのに対し、文治年間の諸像はボリュームたっぷりの迫力あるもの。わずか10年の間に作風が飛躍している。

この作風転換が何を物語るのか。

「願成就院は北条時政、浄楽寺は和田義盛という、いずれも関東の有力武将が施主であることから、彼らの趣味を反映した」との見方が有力なのだが、問題は運慶と関東武将との接触はどこで行われたか、という点だ。

従来、「願成就院像造仏の直前、成朝が鎌倉に行った際に運慶も従い、しばらく関東に滞

在した」とされてきたが、運慶は願成就院蔵を造り始める 1186 年の時点で、興福寺西金堂の造仏にも従事しており、長期間、関東に滞在していたことは考え難い。

「しかし、運慶と関東武将との接触は、京都でも起こり得る話なのです」

実際、北条時政は京都に長く滞在したことがあり、和田義盛も平家討伐祈願のために上洛。そのほかにも、戦乱に乗じて関東武将たちが多く畿内に入ってきている。つまり、運慶は畿内における接触によって、関東武将の好む造形を理解し、それを反映させたのではないか。

「特に願成就院のように量感があって迫力のある像は、それ以後の運慶作品にはほとんど見られないもの。何か特別な事情があったのではないか、と考えたくなります」

●運慶作はどこまで広がるか？

そして、運慶研究で一番の問題となっているのが、運慶作をどこまで拡大するか、ということだ。

明治時代、古社寺保存法によって伝運慶作は 17 件と指定されたが（現在、運慶作と認められているものは 0 件）、その後は激減し、1900 年の『稿本日本帝国美術略史』では、東大寺南大門金剛力士像程度とされている。以降もせいぜい 5～6 件程度とされてきたが、近年になって、伝運慶作が急速に増えている。

栃木県・光得寺の大日如来像、東京・真如苑の大日如来像、京都・六波羅蜜寺の地藏菩薩像の 3 点は、それぞれ作風や納入品の X 線調査などから、「概ね運慶作」とされている。

「次に、運慶作の可能性が議論されているものです」

1 つめは、東大寺の重源上人坐像。写実の巧みさは運慶のものとするが、重源の阿弥陀信仰の影響を受けていた快慶ではなく、なぜ運慶が造ったのか、と指摘する人もいる。

2 つめは、興福寺南円堂四天王像。これは康慶の作とされてきたが、今では、康慶作の四天王像は実は中金堂のものであるというのが定説化している。

では、南円堂四天王像は誰の作なのか。現在支持されているのは、「もとは北円堂にあったものであり、運慶作ではないか」という説だ。

「決め手は用材です。南円堂四天王像は桂材で、北円堂四天王像は桧材。でも、“北円堂の無著・世親像にも桂材が使用されているから、北円堂の四天王像にも桂材を用いたはずだ。だから、南円堂四天王像はもともと北円堂のものであり、運慶一門の作である”というわけです」

3つめは、京都にかつてあった浄瑠璃寺の十二神将像。現在、東京国立博物館に5軀、静嘉堂文庫美術館に7軀所蔵されている。江戸時代の伝承や、像内から運慶の名前が出てきたと書かれた明治時代の新聞記事もある。しかし、静嘉堂文庫美術館の7軀のうち2軀は2013年度に修理が行われたが、銘文や納入品は発見されていない。「東京国立博物館のほうの銘記は分からないので、今後の調査を待ちたいと思います」

十二神将像も写実的で巧みだ。「しかも鎌倉時代前半の作品となれば、運慶の名前をつけたくりますが、細心の注意が必要です」と根立教授。江戸時代の伝承の多くはその後、運慶作でないことが判明したが、そんな事態は避けなければならない。

「今後、運慶作が拡大する傾向は続くでしょう。しかし、じっくりと時間をかけて検証していかないと、間違いを繰り返すことになります」。根立教授の真摯な研究姿勢を表す言葉で、講演は締めくくられた。



「江戸時代に運慶作とされた根拠」を聞かれ、「運慶は仁王像や閻魔像のような力強く迫力あるものを造っている仏師、というイメージが定着していました。それが大きく影響したのでしょう」と根立教授